

# 「土佐の鯨男、柳原勝紀伝」の刊行に寄せて

元 IWC 日本政府代表 米沢 邦男



草稿を拝読したが本書は、類書には珍しく、共著の形式をとる。本書を単なる個人出世物語にしたくないとする御子息紀文氏の意向であろう。

事実、その記述は、始終、余計な感情移入を避け、淡々として、事実に至るまでを語らせる。そこでは、勝紀氏と氏の創設した日東捕鯨の歴史が、巧まらずして、それを取り巻く日本の捕鯨、漁業史と激動に揺れた戦前戦後の世相と一体となって流れ、本書の読み易さと史料価値を高める結果となっている。

翻って、この時代、勝紀氏と同じような逆境から数多くの成功者が輩出している。

時代の勢いと総括しうるものでもあろうが、社会的貧困と矛盾にさいなまれた戦前の社会にあつて、そこに、こうした人物を産む土壌と、彼等にその機会を与えた階層的流動性がおお存在したということでもあろう。一九三八年、三二歳にして勝紀氏は、二百円の月収を得、その翌年、独立を目指して退職した氏に、合計三千円の退職金が手渡されている。当時、小学校の校長の月収が百円前後、帝国大学の卒業生の初年給が七十円であつたことを考えると、それを可能にした氏の力輔・人物にはただ驚嘆する外はないが、他方、この若い現場主任にこれだけの待遇を用意し得た沿岸捕鯨のたくましさと度量に、筆者はなお一層驚かされるのである。

本書は、晩年の氏の蹉跌にも潤色を加えることをしない。氏に限らず、この頃、急転回を遂げつつあつた社会経済のうねりの中で、かつての巨人が、まさにその巨人たる故に、多く道を誤つた。氏も、見込み違いの海外事業などに失敗し、遂に四面楚歌の中、自ら創設し、育てあげた会社を追われるが、彼の長男紀文氏を中心とする若手経営者は、結束して新しい経営戦略の下、会社を困難から救い、更に大きく発展させた。勝紀氏は、それを全て見届けた末、百歳に近い生涯を終えた。さぞかし、満足しての旅立ちであつたであらう。

した、「漂異紀略」の著者としても有名である。図二は海岸でのクジラの解体の様子が描かれている。この絵を含む五組の土佐の捕鯨図は、明治期の水産博覧会に高知県から出品されている。そこで津呂組は、この漁法の導入のために、一六八一（天和元）年に多田吉左衛門を太地に

派遣した。そして、長い期間を掛けてようやく大地覚

右衛門の信頼を得て、一六八三（天和三）年に許可を得て新技術の導入に成功した。浮津組も一六八五（貞亨二）年に、この新技術による捕鯨を開始した。

土佐の捕鯨を支えたのは土佐藩であり、初期の捕鯨組の水軍としての軍事的意義は、徳川時代の太平の世と共に次第に薄れていったが、藩は融資や資材の払い下げなどをすると共に、他の漁業の操業規制を捕鯨場に施して、捕鯨を保護した。津呂組と浮津組は、こうして藩の保護の下で、津呂、浮津、三津を基地とする室戸岬漁場と、窪津を基地とする足摺岬漁場を、一年交代で使用して操業した。図三は江戸時代から明治時代の土佐における古式捕鯨の捕鯨場の位置を示す。

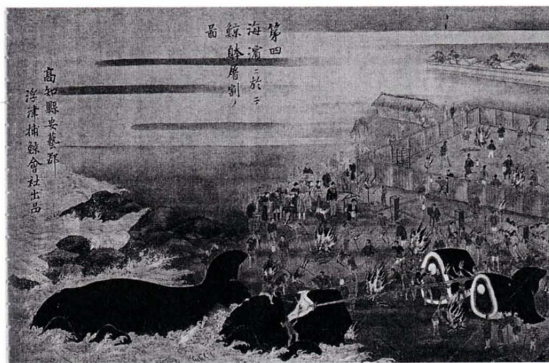


図2. 1883（明治16）年に上野で開催された水産博覧会に津呂捕鯨株式会社が出品した土佐の古式捕鯨「鯨解体図」：5組の捕鯨図の第4

浮津組と津呂組は一八六六（慶応二）年に藩に没収されて藩営となり、同年に設立された「捕鯨局」に所属した。藩営の鯨組は「御手先組」と呼ばれ、殖産興業の一翼を担うものとして期待されたが、さほどの成果を上げることなく、明治維新を迎えた。

一八七二（明治四）年の廢藩置県に伴って、鯨組は高知県営となったが、県は捕鯨事業を民間に移すことを奨励し、民間からの申し出があれば、経営を委託した。しかし、いずれの経営者も、捕鯨業に不慣れなためと、沖合で操業する外国の帆船捕鯨の活動による鯨類資源の減少のため

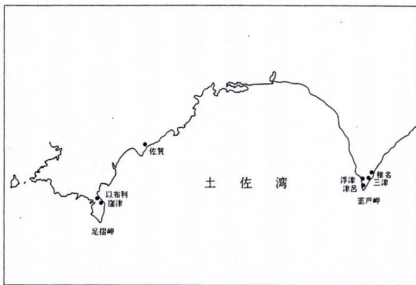


図3・土佐の古式捕鯨時代の捕鯨場の位置

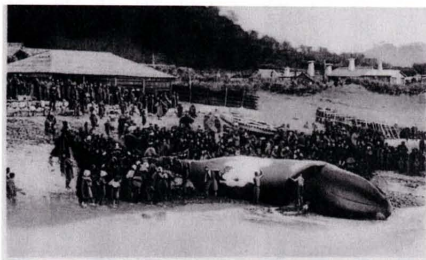


図4. 古式捕鯨時代の室戸町浮津浜で解体されるセミクジラ（1890〈明治30〉年代）

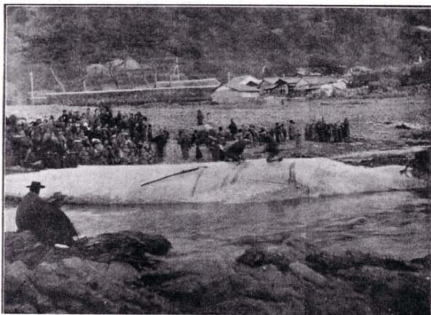


図5. 津呂捕鯨会社が室戸崎で捕獲したシロナガスクジラ（1890〈明治30〉年代）